

「デキル子の学習センス」が お子様の身につく いちばん簡単な方法

福島 美智子 著



はじめに

私が脳の神秘に魅せられたのは、25年以上前になります。5歳になったばかりの長女を乗せて海岸通りを家族でドライブしていました。夕日が水平線に消えようとしている美しい光景を、皆で言葉もなく、ただ黙って見ていました。すると、突然長女が「このお日様は、鹿児島のおばあちゃんのところでは、まだ照っているんだよね？」と言ったのです。

一瞬何を言っているのかと、あっけにとられていると、更に長女は続けて言いました。「だって、お日様は東から出て西に沈むってこの前教えてくれたじゃない。鹿児島は地図でみたら西にあったよね。それじゃあ、このお日様は鹿児島ではまだ照っているってことだよな？」

やっとわかりました。いくつか断片的に教えていた知識を長女は、今沈みゆく太陽を見ながら思い出し、つなげて、発見したのです。この太陽は、ここ（東京）では沈むけれど西にある鹿児島では、まだ照っていると。

もしこれが大人の方が言ったことだったら、なんとも思わなかったと思いますが、この世に生まれて知識もほとんど持っていない5歳になったばかりの女の子が、わずかばかりの知識をつなげて、考え発見できたということは私にとって衝撃的でした。

“いつ、つなげることができるようになったのだろう”

他の5歳の子はどうなんだろうと、友達に聞くとまだそういうことができない子もいることを知りました。

“つなげることができるようになるには、どのようにしたらいいのだろう”

不思議で、そして俄然興味がわきました。そこから脳や勉強法について本を貪るように読み、セミナーに参加し、自分でも繰り返しやってみました。しかし、その頃はまだまだ脳はブラックボックスと言われ、ほとんど研究もされていない状態でしたので、いろんな方にインタビューしてまわったこともあります。

例えば、理化学研究所にいた方に子ども時代の過ごし方を聞いて、まとめたりしたこともありました。また、東大の数学科を出た方に数学の問題を見た時、どう処理していくのかと何時間も聞いたこともありました。

とにかく、できるようになる人と、できない人の違いや、できるようになる過程に興味があり、様々な人と会ったり、学んだりをしてきた25年でした。

そうしているうちに、「脳の回路ができるプロセス」について理解が

深まってきました。なにかできるようになるには、回路をつくる必要がある。できない時には、このプロセスのどこかを飛ばしているからできないだけだということもわかるようになりました。

ということは、回路は作ることができる！そして、学習の教科ができる、できないという時も同じように回路をつくればいいのです。

そこでその回路をつくるプロセスを入れたカリキュラムを提供できる塾をつくらうと思い、試行錯誤の末開発したのが、脳科学をとり入れた RAKUTO メソッドです。

今回は、その中のほんの一部ですが「地頭」をつくる土台の“ワーキングメモリー”の鍛え方と学習脳をつくる時のポイントを紹介致します。

RAKUTO 代表 福島 美智子

地頭（学習センス）をつくるコツ

はじめに

第1章 地頭という言葉を知っていますか

第2章 「考える力」の土台“ワーキングメモリー”

第3章 “ワーキングメモリー”を鍛える4つのコツ

- ・コツ その1 図形を使って鍛える
- ・コツ その2 計算で鍛える
- ・コツ その3 トランプゲーム「神経衰弱」で鍛える
- ・コツ その4 物語で鍛える

第4章 「学習センス」の土台“国語脳”“算数脳”

第5章 学習脳をつくる3つのコツ

- ・コツ その1 ひとつのことに熱中させる
- ・コツ その2 体感させながら教える
- ・コツ その3 大人と一緒に学習させる

おわりに

第1章

地頭（じあたま）という言葉を知っていますか？



第1章 地頭（じあたま）という言葉を知っていますか？

これから子どもの地頭を作るといってお話をさせていただきたいと思います。

まず、地頭という言葉をご存じでしょうか。聞いたことがある方もいらっしゃるでしょうが、初めてという方もいらっしゃると思います。

地頭というのは、学習に使われるというよりはビジネスで使われているんですね。

地頭とは、「未知の領域や不測の事態に立ち向かい打破できる総合的な力」とか、あとは「ロジックに道筋を組み立て答えのない領域でもクリティカルに考える力」そして「その問題に最適の発想ができる力」こういうふうに定義されています。

ということで、知ってることをそのままやるのではなく、初めてあった問題にも自分で考え対処できる力を持っているものを“地頭力”といいます。

最近ではこれが学習の方でも使われるようになってきつつあります。

学習の場で、どう使っているのかといいますと、“学習したことをすぐに理解し、いろんな問題を解くことができる力”となります。

さて、この力をつける為には、学習センスが育っているというのが大前提です。まずは学習センスがなければいけません。その上で“学習したことをすぐに理解し、いろんな問題を解く”ことができる力のことを地頭力といいます。

つまり知識がたくさんあるとかではなくて、考える力を持っているということなんですね。

考えるときには、ある程度知識があることが、問題を解く時に必要になります。知識と知識の組み合わせをしないと考え、解くことができません。

一応「地頭」の定義を、少しお話しさせていただきました。

ところで、先ほどからキーワードが2つ出てきています。“考える力”と“学習センス”です。

「地頭」の話を知ると、「そういうふうに、うちの子どもを育てたい」とか「そういうふうな頭にしたいわ」と皆さんおっしゃる方が多いです。

しかし、“学習センス”って、どうやったら作りことができるのかわからない。

“考える力”も、確かにそれは大事だけれど、どうやったら作られるのか、わからない。

そんなところですよ。

それではどうやったらいいか、具体的な話と絡めまして “学習センス” と “考える力” を育てる方法をお話したいと思います。



第2章

「考える力」の土台
“ワーキングメモリー”

第2章 「考える力」の土台“ワーキングメモリー”

まずはキーワードの一つ“考える力”について話をします。

どうやったら“考える力”がつくのかということですが、“考える力”をつけるには、まず“ワーキングメモリー”を鍛える必要があります

考えるという時、知識も必要です。しかし、ただ知識がたくさん入っているだけでは“考える力”にはなりません。それを目の前の出来事に対処できるように組み合わせていけるというのが“考える力”です。そういう意味では、知識もやっぱり必要なんですね。その知識を使う時、“ワーキングメモリー”が必要になってくるのです。

それでは「“ワーキングメモリー”ってなんだ？」ということになりますよね。

“ワーキングメモリー”というのは、作業するための記憶と関係しています。

なにかの知的な作業するとき、まず外部からいったん情報をどこかにストックしておきます。そしてそういうものをストックできる量が多ければ多いほど、“考える力”があるということになります。

言い換えると、記憶や情報を脳のメモ帳に一時的に貼り付けておいて、

作業する。その作業で出た結果を脳のメモ帳にまた貼付けておいて、更に記憶や情報を脳から取り出す。というように、繰り返しながら作業をしていく。

深く考える時、これを「何度もこの手順」を繰り返していています。



例えば算数なんかですと、1桁+1桁くらいの計算というのは、ひとつの作業をしたら終了。答がでますので、あまりストックする必要もないのですが、3桁+3桁くらいになるとどうですか？

繰り返りがあると、1上がってとか、それを脇に少し置いてとやりますよね。それをもし頭の中でしているとしたらいかがでしょうか。頭の中でストックしなきゃいけないということになります。これが高学年の文章問題になりますと、1つの式を計算しただけで答がでてくるような問題は、ほとんどありません。

例えば、まずは割合の計算をやって、次にほかの演算をやって出て来た答と先ほど割合での答を合わせて考えるというようになります。

あまり算数が得意じゃないお子さんにありがちなのは、さっき出した答を置いて次の演算をしている

うちに、すっかり先程の答えを出した答のことを忘れてしまい、次にやった演算での答えを最終の答えにするということがあります。

つまり、分からないというより先程出した答を忘れてしまっているから正解できないということも多くみかけます。これは、“ワーキングメモリー”を鍛えていないということも原因の一つでしょう。

また小さいお子さんにとって、この“ワーキングメモリー”というのは非常に重要です。これがたくさん貼り付けておけるかどうかというのが、意外と頭の整理と関係しているんですね。

理解の良し悪しというのは、頭の整理が出来ているか、出来ていないかに関係しているからです。

それでは少しだけ皆さんに“ワーキングメモリー”の体験してもらいたいと思います。

表表紙をご覧になっていただけますか。こういうの、一時的に流行りましたね。

*** “ワーキングメモリー” の体験①***

それではやり方を説明します。文字を読むのではなく、色を読みます。

例えば 赤という文字を黄色で書いてあったとします。

ということは、その赤の文字を見ながら「きいろ」と声に出します。
(表表紙の「練習です！」で練習してみてください。)

このように読んでいきます。表表紙に「本番です！」と書いてある文字の色をテンポよく言って下さい。間違えても止まらないで下さいね。それでは始めてみましょう。

はいありがとうございます。いかがでしたでしょうか。最後まで間違えずに全て言えましたか？簡単にみえて、テンポよくやっていると意外と途中で間違えたりしたのではないのでしょうか。

これは頭の中でどんな作業をしているのでしょうか。頭の中での手順は、まずルールを覚えることから始まります。

“文字を読むのではなく、色を読みます”というのがそれなんです。なのに、やってみると文字を読みたくなりましたよね、どうしても。何故かと言いますと、今までの習慣だからです。文字を見たら、その

まま言うというのが習慣です。

それを1回抑制してそのルールどおりに読んでいると、自分の中の習慣（文字をそのまま読みたくなる）ではなく、“ルールはこれだよ、ルールどおりに！ルールどおりに！”と、覚えたルール通りにやるのですが、これが“ワーキングメモリー”を使うということなのです。

“ワーキングメモリー”というのは脳にメモをすることでした。“文字を読むのではなく、色を読みます”というメモはしたけれど、余計な情報（自分の中の習慣で、文字をそのまま読みたくなる）は、1回抑制をしないとルール通りの答えが出てこなかったりするんですね。

“ワーキングメモリー”を鍛えると何ができるようになるのかということですが、脳の中にポストイットが、たくさん貼れるようになると言ったらわかりやすいでしょうか。幾つもポストイットを貼って、必要なときに必要なポストイットを持ってこれるようになってくる。

仕事しているとプロジェクトにいくつか関わるということがありますよね。大体幾つか抱えているのではないのでしょうか。その時に、こちらをやっていたら他のプロジェクトはすべて忘れてるということはないですよね。

それどころか、意外と両方同時に考えたりしています。こちらをやってるときに、もう一つのプロジェクトについてアイデアが湧いてき

たりとか。もしくは、両方に共通して使えるものが見つかったりとか
するとか。

脳を多重に使える方は、かえって効率が上がるとというのが、研究報告
であるんです。だから1つのことをするだけではなくて脳を多重に使
う方がいいのです。ただし、まだ小学生ですから、そんなにいくつも
いくつもというわけにはいきません。まずは少しずつ、“ワーキング
メモリー”を鍛えていこうというふうに思っていたきたいです。

***** “ワーキングメモリー”の体験②*****

さて、もう1つ“ワーキングメモリー”の実験をやってもらいます。

これもワークですので皆さんもちょっとやっていただけますか。

この冊子の表紙の裏側にある“数字”を見て下さい。

一瞬みて、覚えといてください。

いいですか一瞬ですからね。

はいっ！見ていただけましたか？大丈夫ですね。

では次に行きますよ。

この冊子の裏表紙の裏側を見てください。

なんだか図形がありますね。これはなんという図形でしょうか？

四角と丸ですね。それでは、次にそこに書かれている文字を声に出して言ってください。

はい、どうぞっ！

はいありがとうございます。

ここに書かれている言葉は、正しいですか？間違ってますか？

はい、そうですね。間違ってますね。

それでは、先ほどの数字を覚えていますか。声に出して言ってみましょう。

はい、ありがとうございます。

これも“ワーキングメモリー”を使っているのです。私たちは何かする時、こういうことをいくつもいくつも同時にやっている訳です。

一つのことしかできないというお子さまは、この“ワーキングメモリー”が鍛えられていないのかもしれない。

今の例題をもう少し複雑にするのなら、単語を5つ6つ覚えた後に次の作業として、もっと複雑なことをやります。

例えばある文章を反対から読みましょう、とか。そういうことをやった後に先程覚えた単語をもう1回言うとなると、いかがでしょう？

だんだんと頭の中でこんがらがってきて「あれ？使えなくなったな」とか感じられるかもしれません。

お子さんのことを「簡単なことなのにできない」とおっしゃる保護者の方がいらっしゃいます。

簡単にみえて、こういう複雑なことを頭の中では行っている訳です。これが鍛えられていないと、高学年になればなるほど勉強の成果が出てにくくなります。高学年の難しい算数の問題となると、1回や2回の演算で答えがでるといような単純な問題ではなくなります。いくつもいくつも演算の工程をへて初めて答えが出てくるといった問題が多いのです。“ワーキングメモリー”、すごく必要なんです。

小さいうちにできることであり、また大きくなってからでも例えば成績が上がらない場合は、一度“ワーキングメモリー”を鍛える練習をしてもいいかもしれません。

よく、簡単な問題はできるけど、ちょっと複雑になって何回か演算の工程をへないと答が出ない問題になると、途端に出来なくなると言う場合は、“ワーキングメモリー”を鍛えてみて欲しいですね。

ワーキングメモリーを一を鍛えると？

脳の中に「ポストイット」を貼っておく
必要な作業を記憶し、ポストイットに貼っておく
いくつも貼り、必要なポストイットを持ってこれる



脳を多重に使えるようになる



第3章

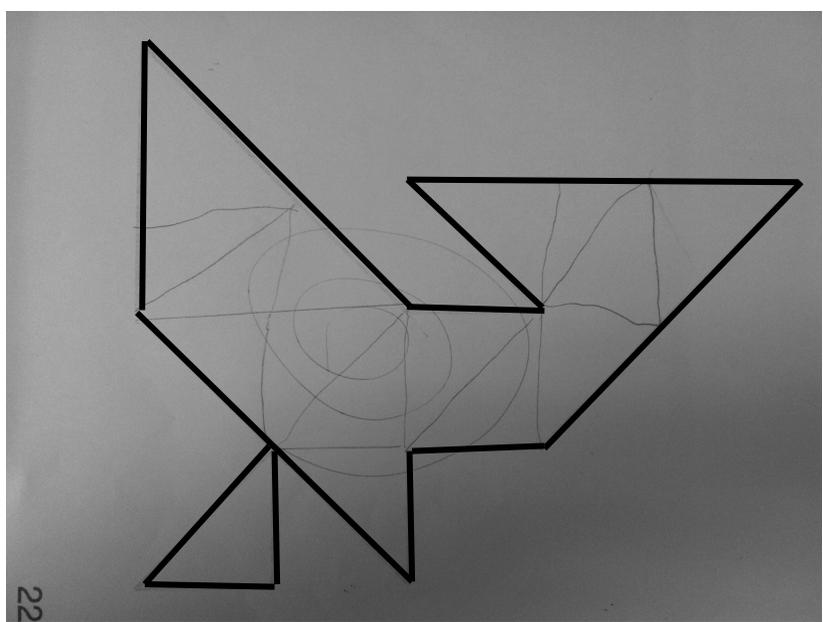
“ワーキングメモリー”を
鍛える4つのコツ

第3章 “ワーキングメモリー” を鍛える4つのコツ

コツ その1

「図形を使って鍛える」

下の図形を見てください。こちらは年長さんにやってもらったものです。これは何かというと、皆さんご存知かと思いますが、タングラムです。外枠の形に合わせて、三角を置いていきます。そしてこの図形を完成させるというものです。



これで“ワーキングメモリー”を鍛える教材にするとすると、一度完

成させた後、この三角の位置を記憶してもらいます。そして、次にこの上から置いてある三角をすべて、取りはずします。その後、今三角を置いてあったところに三角の線を書いてもらいます。

それが、この図形です。線がまだ幼稚園の年長なので薄くて見えにくいんですけど、三角が書いてあるのがわかると思います。これは、先程自分で置いた頭の中にある三角を思い出しながら書いていっています。年長で、この斜め線が書けるのは素晴らしいと思います。

このお子さんは、幼稚園に行ってるんですが、そちらの課外授業のIQで160以上のお子さんたちだけが集まってるクラスに入っているそうです。そのクラスの中でも「これを始めてから、課題をこなす作業スピードが、他のお子さんに比べ倍ぐらいになった」とお母様が、おっしゃっていました。そのクラスの先生は、あまり普段褒めない先生だということですが、先日「子どもさん、急にどうしたんですか。すごいです。飛び抜けました。」と言われましたと、ご報告いただきました。

“ワーキングメモリー”をちょっと鍛えていだけで課題の作業スピードがアップしたわけです。

コツ その2

「計算で鍛える」

例えば、計算とかでやらせる場合にはどうするかといいますと、計算の場合、普通に計算するのではなく頭の中でさせます。最初は時間がかかってもいいので、ゆっくりやらせていきます。

【問題 $38 + 26 = ?$ 】

「まず1の位から始めましょう。」

「 $8 + 6$ をするよ。はい、いくつかな？」

「そうだね、14だね。」

「じゃあ、1の位の4はそのまま1の位の下に置いて、10は10の位へいくよ。」

「それじゃあ、10の位の $30 + 20$ をして、さっきの10を更に足すよ？さあ、いくつになった？」

「うん、60だね。」

「最後にさっきの1の位はいくつだったかな？」

「答は？そう64。」

最初は、これくらい丁寧に話ながら数字をイメージさせます。実際には書かせません。頭の中のイメージだけで計算をさせていきます。

しばらく続けていると、一人でもできるようになります。そうしたら、桁を増やして3桁+2桁とか3桁+3桁……。その後、更に増やし

ていってもいいですね。これも、繰り上がりや、計算した後の数字も覚えていなくては答がでませんので、“ワーキングメモリー”を鍛える為のいい方法です。

もしできなかった時には、実際に積み木でやってみるといいですね。そうすると、頭の中でイメージできるようになります。積み木とか使っていると、頭の中でイメージを再生しやすいのです。そうやって“ワーキングメモリー”を鍛えていきます。

計算ドリルを使ってもできます。そうするとただの計算ドリルではなくて、“ワーキングメモリー”を鍛えるための教材になるわけです。

よくこういうのを聞くと、「じゃあ、すべてこういう風にやらせたらいいのですね。」とおっしゃる方がいます。どういうふうにやらせるのかというのは目的によって違うと思ってください。スピードをつけさせたいというのが目的だとするならば、どんどん素早くやらせていくということも OK です。

同じ計算をやるにしても、“ワーキングメモリー”を鍛えるには、この方法でいいのですが、これだけだと、計算するのに時間かかるということになります。

以前お母様にこれを教えたら、小学校の2年生ぐらいまでこのやり方ですっと計算をやっていたという話がありました。2年間、計算が遅

かったらしいです。

ところが3年生の始めぐらいに突然変わったとおっしゃってました。量感が身に付いたので、文章題の理解も早くなりクラスで一番早くできるようになったとおっしゃられました。突然ですよ。

「脳って面白い」といつも思うのですが、回路ができたら急に人が変わったみたいにできるようになります。少しずつというより、ある日突然というくらいの変化があります。

水中を潜水していると、外からみてもそこで誰か泳いでいるとはわかりません。水面近くで潜水していても、顔を出さなければわかりません。しかし、水面から顔を出した時はじめて、そこに人が泳いでいたことが分かるのです。

脳に回路ができるまでは、同じように外からは見えないのですが、できてしまうと「能力」が発現し始めるので、誰からみてもわかるようになります。

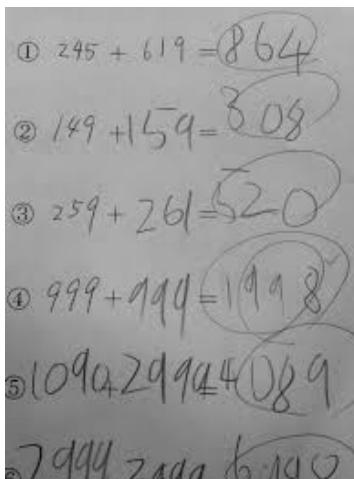
初めて経験するものは、よく「3か月は続けましょう」と言われますが、確かにそれくらいと思っているといいですね。

根本的な大きな回路を作るときは、3年でしょうか。小さな回路だと3カ月。「こういうことができないんです。出来るようになるには何

をしたらいいでしょうか。」という相談がありますと、こちらでお子さんの様子を見て、「こういう方法でやってみましょう」とやって、まず3カ月様子を見ます。3カ月で何かしらの効果成果が出ない場合は方法を変えるんですね。ただ、純粋に回路というより、心理的な場合があったりすると更に時間がかかることもあります。

ともかく、最低でも3ヶ月はしっかり同じ方法を続けることが重要です。

**“ワーキングメモリー”は
「脳内でイメージするチカラ」**



コツ その3

「トランプゲーム“神経衰弱”で鍛える」

“ワーキングメモリー”を鍛えるのに、トランプゲームをするのもいい方法です。トランプゲームをしていると“楽しい”ので、何回でも行うことができますし、また感情を使うと“記憶”しやすいとも言われています。

皆さん、「神経衰弱」のやり方はご存知だとは思いますが、一応説明しますね。

=====

《プレイ人数》2～8人

《使用カード》52枚（ジョーカーをのぞく）

《基本ルール》裏向きになって散りばめられた52枚のカードの中からカードをプレイヤーが2枚めくり、その2枚が同じ数字だったら自分の物にすることができます。場にカードがなくなった時点で、一番たくさんカードを取得していた人が勝ちです。

《遊び方》

- ① 52枚のカードを、重ならないように裏向きに綺麗に並べます。
- ② じゃんけんで、順番を決め、勝った人が基準に時計回りに進めていきます。
- ③ 順番にカードを2枚めくり、2枚とも違う数字なら周りの人に見せて、番号を記憶し再度2枚とも裏向きに戻し次の人に順番を移す。

- ④ 順番にカードを2枚めくる。その2枚が同じ数字のカードならば、その2枚を獲得する。
- ⑤ めくった2枚が同じ数字だった場合は、その人はさらに2枚のカードをめくることができる。
- ⑥ 2枚のカードが同じ数字のカードである限り、その人の順番が続く。
- ⑦ 場にあるカードが全て無くなったら、ゲーム終了。一番多くのカードを獲得した人の勝ちとなる。

=====

小さいお子さんには、カードの枚数を減らしてあげるといいでしょう。初めは6枚くらいから始めてあげてください。慣れたら8枚、10枚と
いうように少しずつ増やしていきます。

“楽しい”というのは感情です。この感情が記憶と関連があります。

だから楽しくゲームをしていると、どんどん鍛えられていきます。小さい頃は特に“苦しい”作業よりも、“楽しい”作業になるように工夫してあげる必要があります。

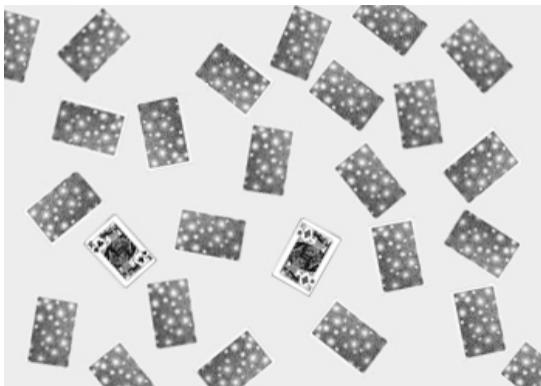
大きくなると、苦しいけど頑張ったら“できた！”というのが達成感になり、そこは気持ちがいいので、その達成感を味わうために頑張ることができるようになります。

しかし、小さい頃は、目の前の“楽しい”の方が重要です。楽しくないと続けてくれません。

この“熱中する”というのが、自発性を育てるのにも重要になります。

ですから、小さいうちは、「頑張れ！頑張ったらできたという喜びが待っている」より「楽しむ！楽しんだらいつの間にかできていて、できた喜びも味わえた」の方がいいのです。

楽しむと「記憶するチカラ」がアップ！



コツ その4

「物語で鍛える」

それでは物語で“ワーキングメモリー”を鍛えるには、どういうふうにするのかを話します。

物語を読んだ後“あらすじ”を言ってもらいます。国語があまりできないとおっしゃるお子さんは、“あらすじ”が言えないという子がとても多いんですよ。

以前、「4年生で国語がまったくできないんです」と相談を受けたお子さんがいました。それでやっぱり、“あらすじ”がまず言えない。“あらすじ”を言えないと、なぜ国語ができないかという、その長文を理解できていないのに、問題に答えることはできない。ということです。

RAKUTOは、国語力を伸ばす方法論を確立していますので、国語が伸びるようになるのですが、“問題に答える力”よりも“読み解く力”の方を先に鍛えていきます。それほど読む力が大切なのです。

少し話がそれましたね。この話はまた、どこかで話すこともあると思います。

話を戻して、“ワーキングメモリー”を鍛えるということでしたが、物語で“ワーキングメモリー”を鍛える時、“あらすじ”を言わせる

ことについて、もう少し詳しく話します。

まず読んだ後に自分の中で、その話を再現できないと“あらすじ”なんて言えないんですね。ということは、一旦脳の中のポストイットに物語を貼っていきながら聞き、再現するときはポストイットを見ながら話すので、“ワーキングメモリー”を鍛えることになります。物語というのは、けっこう長いですよ。あれを再現できるというのは、かなりの量のポストイットが必要になります。

ただ、初めから一人で行わせるのが無理な場合はお父さん、お母さんがちょっと誘導してください。

「サルが来たよね、その後どうなったんだっ？」という具合に誘導してあげると、思い出しやすくなります。そのうち次第に一人で言えるようになっていきます。

この時、要点を押さえていなくて要領を得ないような話になっていても気にしないで下さい。これで十分に“ワーキングメモリー”は鍛えられているからです。要点を押さえるというのは、別な力になり、それはそれで鍛えなくてはなりません。

ところで、より早く効果がでるやり方を紹介します。それは「声を使う」ということです。

物語だと、語り聞かせをすると非常に記憶に残りやすくなります。また、お子さんに音読してもらうのもいいでしょう。ただ、音読を嫌う場合は、一緒に読んであげるといいですね。最初のうちは、音読しながら疲れると声を出さなくなってしまうということが多々あると思います。そういうときは、無理矢理「ほら、声をだして！」などと言うと、語り聞かせの時間もイヤになります。そのままお父さん、お母さんだけ続けて読んであげてください。

インプットする時に「耳で聴く」「目で見える」「自分で話す」など五感を使うと記憶に残りやすくなるのでお勧めです。

**“ワーキングメモリー”は
「脳内でイメージするチカラ」**

インプットは、
「耳で聴く」
「目に見る」
「指を使う」
「声を使って音読」
など、五感を使った方がよい



第4章

「学習センス」の土台
“国語脳”・“算数脳”

第4章 「学習センス」の土台“国語脳”・“算数脳”

それでは学習センスとはいうのはなんでしょう。「あの子は学習のセンスがあるよね。」という場合、どんなことを想像しますか？

例えば、「授業で聞いたら、すぐ理解して問題ができるようになった。」
こういうことではないでしょうか。このような状態に子どもがなっている時というのは、脳の中で何が育っているのでしょうかね。

一言でいうと、国語なり、算数なりができるということは、脳の中にその教科を理解するだけの回路があるということです。回路があるかないかという、とてもシンプルな話なんです。

回路は刺激によって作られます。刺激されると脳の中に“道”のようなものが作られていきます。ということは、刺激されていないか、不足していると回路が育たないということになります。

また、特定の刺激しか与えていないと、与えられたところしか育たないということになります。脳には分野とか領域が決まっていますのでそうなります。

お子さんにできないものがあったら「うちの子はなんでできないのかしら。困ったわね。」ではなく、「あら、できないのね。それじゃあ、回路をつくってあげなくちゃね。」といろいろ刺激を与えてあげるよ

うにするといいですね。

つまり学習センスというのは、“学習を理解できる基本回路”のことです。学習をするのに、この基本回路がなければ、授業を聞いても先生が何を言っているのか、理解できないとなります。

RAKUTO では、このような回路ができた状態のことを“国語脳”とか“算数脳”とか“社会脳”とか“理科脳”が育ったなどと言っています。

ではどうやったら、そのような学習センスのある脳が育つのでしょうか？

よく見られる方法は“問題をたくさんやる”というやり方です。

う〜ん、間違っはいいませんが、この方法だと、育つ前に子どもに嫌がられてしまい、勉強してくれなくなった、ということになりかねません。

小学生までの子どもは、まだ脳も成熟していないので、がんがんやらせるという方法は、あまり向いていません。次の章で学習脳をつくるコツを話していきます。

《脳の中にある回路》

刺激の種類によって得意・不得意がつけられる
学習を理解できる「基本回路」



国語脳・算数脳・社会脳・理科脳



第5章

学習脳をつくる

3つのコツ

第5章 学習脳をつくる3つのコツ

コツ その1

「ひとつのことに熱中させる」

次のような相談を受けることがあります。

「うちの子が日記を一生懸命書くようになりまして、喜んでいますが、しばらくしたら飽きちゃって・・・今では何度も言わないとやってくれないし、渋々やるんです。しかも、何にも考えないでチャッチャッとやってしまいます。」

また、このような相談もあります。

「鉄道模型を毎日毎日、作っています。他のことには見向きもしません。これでいいのでしょうか。」

皆様も心当たりがあるのではないのでしょうか？

このような状態を“フロー状態に入っている“と言います。集中力が非常に高くなっており、周りのことが見えなくなるのです。勉強でこの状態に入っていたら、ご両親は喜ぶのですが遊びでこのような状態に入っていると、眉をしかめる方が少なくありません。でもどんなものからでもいいので、この集中力の非常に高い状態に入れる習慣(脳)

をつくることが重要です。

そして、もう一つ知っておいてもらいたいことがあります。子ども達は、いつまでも同じものを好きで夢中になっていることはありません。どれだけ夢中になるものがあったとしても、たいていしばらくすると、気が変わり、他のものにまた夢中になってしまいます。

この時、お遊びのようなものから勉強に気持ちが移り変わるなら大歓迎でしょうが、その反対ならがっかりしてしまうことになったりします。そして、取り上げてしまうこともあるかもしれません。

夢中になる対象が移り変わりながら、様々な回路を育んでいきますので、よほど問題があるような遊びでなければ、そっとしておいて下さい。

この話は私の受け持っていたある生徒のことを思い出させます。その子は小学2年の頃、石に興味をもち、どこへ行っても石ばかり集め、初めてみる石があると喜んで持ち帰ってくるのだそうです。家には石の山ができたそうでそれを見て、お母様は夏休みに「石の標本箱」をつくることをお子さんに提案、名前を一緒に図で調べわからないものは石の博物館に行って館長さんに教えてもらったりしたそうです。夏休み明けに持ってきた石の標本箱は、それは素晴らしい作品になっていました。

このお子さんは、その後も絵日記に凝り、テニスに凝り、社会のレポート書きに凝りと様々ものを渡り歩いていきました。

先日お母様から久しぶりにお電話がありました。慶応大学を自力で受験するんです、という話でした。

そして、中学、高校とどのように成長したかの話を聞くことができました。

その生徒はある私立中学校へ進学したのですが、入学してみると非常に成績の良い子ども達が多く驚かれたそうです。あわてるお母さんに、そのお子さんは言ったそうです。「僕を信じて。中学3年の頃には、ちゃんと追いついて、学年で上位になってみせるから。」そして、実際に中学3年になる頃には学年でも上位の成績をとることができるようになったという話でした。

夢中になることができると、“自発性”が育ちます。自発性の育っている子どもは、自分がやるべきことを見いだしたら、計画し実行するという目的意識へと育っていくのです。

あわてず、小学生の時代は、ひとつのことに熱中させてあげましょう。

コツ その2

「体感させながら教える」

ペーパー学習は大人からみると、準備も楽ですし、枚数をこなせば“やった感”がありますので、“学習＝ペーパー学習”と思われる方も少なくありません。しかし、脳の回路をつくるためには五感を使った“体感学習”の方が、はるかに効果があります。

学習での五感というのは、主に、「見る」「聞く」「声を出す」「手を使う」となります。

「見る」

図や絵、動画などわかりやすいものを見る。このとき様々な色や形が使われていると心地よさを感じるので、より学習意欲が増していきます。また、記憶見たものを記憶しやすくなります。

「聞く」

学習内容を耳から聞くのですが、教える側の口調は楽しい方がより効果的です。怒りながらだと、子どもは耳を塞ぐので、どれだけ言っても内容は入っていないということになります。楽しい口調やささやく方が効果的なのです。また、音楽も非常に効果が高いので、かえ歌にすると、学習内容がいつの間にか入っていて、忘れにくくもなります。

「声を出す」

書いてあるものを自分の声で話すということです。自分の声は骨伝導

で、体の中での響きを聴くという特殊な聞き方をします。耳から聞こえる言葉の中でも、自分の声が一番心地よく響くらしいので、音読などとてもいいと言えます。他には、話しながらの方が自分の考えがまとまりやすいですので、親子で学校での出来事やニュースについてなど、語り合うといいですね。

「手を使う」

学習を手を使って学ぶということです。これは、ただ「字」を書くというより、学習内容を手を使うことで理解するような学習を行うということです。もちろん、学年によっては「字」を書くということも有効になってきます。例えば、次ページ図1のジオラマは、RAKUTOの生徒さんが作った日本列島のジオラマです。。これは気候を学び、理解する為の学習でつくった作品です。授業で気候について学び、学んだことを“手を使って”作っていくうちに、深く理解していきます。図2は算数の体積の公式の学習で、実際に直方体の箱の中に1辺が1cmの立方体を入れて“たて×よこ×たかさ”を体感してもらいました。子ども達から「だから面積は平方センチメートルでcmの上に2を書いて、体積は立方センチメートルでcmの上に3を書くのかあ。」という声があがりました。こういう体感したことというのは、忘れないし身に付くので、応用が効くようになります。

《図1》



《図2》



コツ その3

「大人と一緒に学習させる」

勉強部屋でひとりで籠って勉強しているのを見ると、安心してしまいます。また勉強部屋にいと勉強していると思ってしまいます。大きくなったのだからと、せっかく自分専用の勉強部屋を与えたのに、勉強していたかと思っていたら、ポオーッと置いていて何にもしていないという話も聞きます。

ところで最近“リビング学習”という言葉が使われ始めました。これは、子どもがリビングやダイニングなど親の目が届くところで勉強する学習方法で、東大にいく子はリビングで学習していたなどの定説が教育雑誌などで広まり、この学習方法が見直されるようになりました。

学習脳をつくるのに、どちらが適しているかといわれると“リビング学習”の方です。お母さんと一緒にいる安心感、自分の頑張りを見てもらいたいという気持ちを満足させることができます。

また、適度な雑音が集中するのにとても効果があるようです。仕事や勉強をファミリーレストランやファーストフードとかでやると集中できるという話を聞いたことがあるのではないのでしょうか。ああいう適度な雑音が心地よく集中できる環境になるようです。

他にも集中が切れた時、お母さんと話をするだけでも気分転換になります。人と話すというのは、とても良い気分転換になるものです。ま

たわからないことがあれば、ふと顔をあげればそこに親がいるので、気軽に聞くこともできます。お母さんが一緒にテーブルでお裁縫や家計簿をつけながら、隣で子どもが学習するという環境がリビング学習なのです。

ところで集中とリラックスをうまくできると、学習には効果があるのですが、それを子どもが一人でやるのは基本的には難しいです。勉強部屋で一人でやっている、集中している時はいいのですが、集中が切れた時つい漫画を読み始めたら、そのまま漫画に集中してしまい、学習どころでなくなったりします。

運の悪いことに、そういう時に限って親が勉強部屋に入って来て、やってないとなったりします。子どもにとっては「さっきまでやっていたのに～」となるわけです。

このように親の目の届くところで学習させる“リビング学習”が、安心し集中とリラックスのスイッチの入れかえが適度にできるので、脳の回路づくりの環境としては、とても良い環境となります。

また、一緒に考えてあげることが脳の回路をつくるのにも大変効果があります。二人で一緒に考えているとその二人の脳の中の同じ部位が活性化するのだそうです。ということは、一緒に考えてあげると子どもの脳に回路をつくるお手伝いをしているのと同じになります。一人で勉強しているより、はるかに効果的だと思いませんか。

学校の授業など大勢で聞く場合より、少ない人数の方がいいと言われるのは、大勢だと聞いているようで聞いていないことが多く、そうすると回路はつくられません。少ない人数の方が、聞くしかないで聞いていると、脳の中の同じ部位が活性化しやすくなります。

ましてや大好きなお母さんやお父さんやご家族の話だったら、子どもは一生懸命聴いています。こういう状態をつくる為にも、お小言ばかり言っていると聞く耳をもたなくなりますので、気をつけましょう。ただ、これは甘やかしなさいと言っているのとは違います。楽しい会話をしましょうということです。



《リビング学習をとりいれた RAKUTO 自習ルーム》

おわりに

いかがだったでしょうか。この「地頭のつくり方のコツ」は 2013 年の秋のセミナーの内容を整理し、小冊子としてこのような体裁を整えたものです。

まだまだ言い足りないことがたくさんあるのですが、ひとまず皆様にお届けすることにしました。

脳が育まれる過程のようなものがあるのですが、その仕組みを無視した勉強法はただ子どもにとって辛い思いをしてしまうことになりま
す。本来勉強というのは、知る喜び、つなげる喜び、表現する喜びに溢れているはずなのですが、脳の仕組みを無視しているので、勉強とは辛いものとなっている子どもが多いのではないのでしょうか。

脳の仕組みをわかった上での学習法は、不思議と楽しいのです。

RAKUTO に通っている子ども達が皆「まだ帰りたくない！」と言い、自ら調べ学習をしたりします。

私は子ども達に、豊かな現在(いま)を生きてもらいたいと思います。
楽しく勉強し、だからこそその先には夢見る未来が訪れる、そんな勉強をしてもらいたいと願います。

今やっていることが、将来につながる。そんな身のある勉強をして欲しい。そう考えています。

この1冊が、幸せな楽しい勉強をお子さまにもたらすことを願っています。

RAKUTO 代表 福島 美智子

マインドマップ 速読 高速リスニング

“わが子の才能を
伸ばしながら
学力もアップさせたい”

とお考えの小学生の
お母様、お父様へ

脳科学で学ぶ
新タイプの学習塾
RAKUTO



「国語脳」「算数脳」「理科脳」「社会脳」
をつくるRAKUTOのオリジナルメソッド!

国語

算数

マインドマップ で理解力UP↑

速読

で処理スピードUP↑

理科

社会

高速リスニング で記憶力UP↑

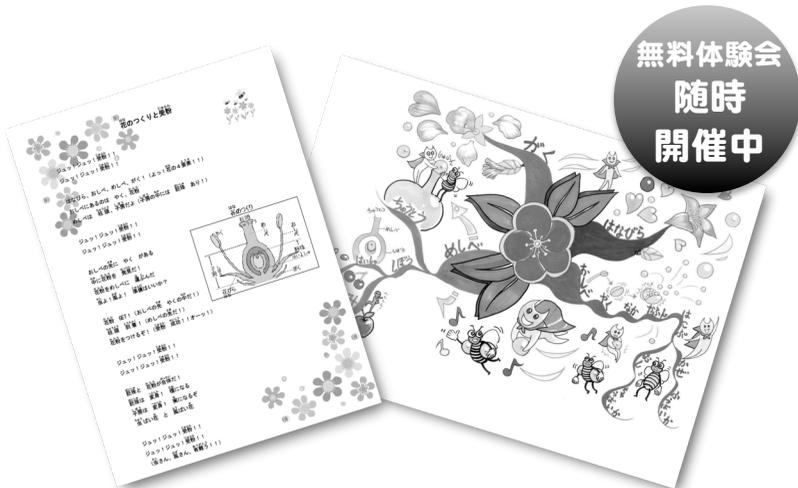
出来る子は、学習センスのある脳、つまり「学習脳」を育てています。これは脳内につくられる“ネットワークの形”の違いによるもの。RAKUTOの授業は、最新の脳科学を活用してネットワークを刺激、お子様に応じた「学習脳」を育てます。だから、お子様本来の“学びの才能”が楽しく、のびのびと目覚めるのです。

驚きの
授業風景は
こちらから!



脳科学授業学習体験会

キミは何倍速まで聞きとれるかな？



無料体験会
随時
開催中

2倍・3倍・6倍

高速リスニングを聴いて ♪ 音楽

マインドマップを描いてみる

理科で高学年も学ぶ「花のつくり」を記憶に残る歌にしました。
2倍・3倍・6倍のスピードで、聴いて、歌って、マインドマップで
まとめます。“楽しく学ぶ”効果を、ぜひ体験してください。

脳科学で学ぶ！新タイプの学習塾

ディスカッション・マインドマップ・速読・高速リスニング

RAKUTO

国語 算数 理科 社会

幼稚園年長～小学6年生対象

体験会のお申込み
お問い合わせは

0120-554-415

(お電話受付: 平日13:00~17:00)
(メール受付: 年中無休)

otoiwase-1@rakutojp.com

RAKUTO

著者 福島美 智子 (ふくしま みちこ)

幼児教室の経営、脳科学学習塾 RAKUTO 代表。

20年近く、脳科学・心理学をベースにした児童向け教材開発に携わり、オリジナルの教育メソッド DMSK 法を開発。驚異的な成果で RAKUTO は継続率96%を誇る。

『マインドマップ基礎講座』『フォトリーディング講座』『勉強にハマる脳作り』『100%右脳記憶法』『教科別・脳の回路の作り方』『勉強が楽しくなる加速学習』他、セミナー・講演歴多数。



地頭 (学習センス) をつくるコツ

発行日 平成27年10月1日 初版2刷

著者 福島 美智子

発行 株式会社らくと

〒107-0062

東京都港区南青山2-11-13 南青山ビル4F

0120-554-415

<http://www.rakutogroup.co.jp/> 「RAKUTO」で検索

—禁無断転載—